近世説美小史　五

へ函3
1279
15

1279
15

村田

近世説美少年録第三輯巻之五

東都　曲亭主人編次

第二十九回　諫を遺しく景市西都に赴く　壁を分ちく黄金陳行を辭ふ

却説黄金いかゞせん。和泉の左衆に赴く。母黨の大叔父なりけり。松積荷三太許寓居する程に主人夫婦の所望よりそ。這年の冬十二月。その子桟太郎に妻せ遣嫁の儲に一金を費さんと及ぶ。居ること豪家の媳婦なりけり。柳浮室屋の主人船積荷三太兩個の兒子なり。件の桟太次郎なれども正妻雄波の腹なれば躰に總領に立られ。大郎は則城藏なり。庶子なりけれ。敗ると三男にあらず。又城藏実母は曩に身の暇を取せそ。近郷なる小賈某乙の妻に做しなり。幾程なく身ごもりけり。現大道に孕まれ産む。桟太郎は富る家の總領なれば生れ出づる心ざま

いと思ひ。敬愛ぶかく辨識らば目あり才あり五色ありて寒暑を覚しの是を
黄金の不得意なりしに他を取り次の年桂太郎は年廿一にて痘瘡を患て危うし
良醫の匙に救れて命ばかりは留れども相貌醜うなりて眼但引吊鼻歪て肌
膚は炙卵を炙過して焦せし似く声頻嗄れて鼻漏る三十二相一箇として欠ぬも
なくなりたれば黄金はいと浅まし思ひのまゝ親里に昔も似ぬるかを知らず這里にて
是で一個の親ありのまゝ再富饒なる人の妻に形ありて
べし左ても右ても這身の薄命良人は痴漢でも醜郎でも手鍋引提て常綺羅で
暇の奴婢に使はれ炙痛苦忻く身の為に炙灼て飲る山椒の字を已る迄優しく
らんと尋思して初は変らで陽ばかり睦しく萬亨良人に機を屬てその足らざるを
補ひければ船積の二親は欲ぶ上大く悲び俺が娘婦は尚弱れども今の浮世に三年
汐ぐ貞女ぶりを竊に稱へて願はくば初孫を産出せかし欲しいぞと朝夕

夕る子を思ふ祈る親心神も及ぶ身の情由知らで間ある国の空枕背合まる妹庚
片宿癖つく耳脆の疾を悟るよりも扨荷三太が妻の雄波い年来血軍の持病
あり是より又餘病発て目に病煩ふ三稔あまり書は日影の厭に糸夜は灯物を
る上克に近屬は又逆上して耳さ疎くなりしに日音春奥に笠竜りて家内なる
しも乙より拾ふて黄金に任せ心安しと思ひ又荷三太は桂太郎が心ざまの鈍を
知れども片羽なる子は不便さの弥増に夜の鶴の脛断まく惜し恩愛の為方とても
あるとあれば只折々に教訓して役に立んと欲ふの然るに這春は周防の山口へ物
見に大内殿へ見参を請まうんとて親子共侶正月の初旬に首途したるに且交易
買賣の所要を兼ねる旅なれば那地の枝店に逗留して春闌まで帰り来ぬその際左
思ふる店舗に注進あり居宅は二男城蔵に預措て内外の差配を任せしに城蔵は
兄に似ず今茲二十五歳なるべ男態苦味あり奴婢の長と做ぶに畢く辯舌水い

流るゝ如く浮薄なるも応對ふよく人の機を攬るゝに日毎に親の名代得意に武家をうち巡りその所要を兼るに諸家の評判なるを他い親も優さうと毎に利潤ヨヌるけり却是まぞの景市が浮宝屋の居宅なる客房を朱之介に其を告る福富氏の慾に迷ふて自滅を取りしその迹既に零落したる緒の顛末迄も長物語あるべきなる。當下又景市に朱之介と其くもう福富氏の滅まて時俺が年十七なりけるに額髪ぶまぐ剃らぬ這里へ来て後ようそ稍男あいなりくれども小猴子ゑれば掙紀なる那折くふ窮しる金に僅ニ三十両その年の冬阿鍵刃祢の安ホコ問へとて福富村へ遣られすけるに雲妻時京師に旅宿して一夕柳巷壯觀より忽地に病着て遊女の為に那金を費の似くる使果して又身に一文なきに里に歌舟内外の機通問と合楫でも底深ふ引水なくて屑る友徒もなくて過ぎ満二年料らぬ長兄と對面の這情嘗に一刻千金なるに味酒の三

輪の話曲ふあるねども書ても夜を深ても再會湯の即效を瞑の生てる樹間と塵も送さで漏らしる且飲めと献ても盃を朱之介取抗るゝ數番嗟歎と思ひや福富公羽の慾ふ耽て可惜ゝ富も栄も五十年家さへ身さへ一炊の夢物ぐらふなるらんと祢とい恰ニ三世ゆ相似て對ぬ奇事なるもあるべかり上ゆも既ふ話せ一ど俺が爺前五郎ふ謀られも福富公羽の舌命とあらんふ哄されも亦到底ふ皆騙姦なる段ゆそその圏套ふ入りしるとのへ景市頭を掉て只一向ゆ笑くとゝ似る像く必ものらんが緒の趣同じやうぞそゝるふぞと推てもゝの色ふ迷て密通財を使ふい九世間の後生ふヨヌるれが長兄が安保ふ謀られも惜ふいあらびその所為又福富の衒ふ是貪慾の致ぞ所那騙姦ふ遇むとも既ふ一千金を窮接られよゝ悟ぬ密夫を撞て二裏の金を添ーい阿饒ゝ總て世の吝嗇家の驕奢を好む心ふ淫を貪らぬるの稀ゝ然まべとそ賣色ゝ財の惜ーちよ惜て講ぜば又立安ふも費あり第一ふ家家が怕ーちよ

らの慾も竟に果さぬうちと些ばかりも鈔に使そ竊せんとて薄情紀人の妻妾の羽箭に網紗にて意外の銭を他が隨意豪奪らるゝ原是鄙吝の筭盤錯誤長兄の衒に比べば雲壤の差別あり豈同日の論あらんや旦夕よりて彼此の情状虚実を猜るに奥を知らんに実情あり譬ば猫兒ぶ主の為に鼠を捉て咬ぶ如し素より主の為にも好む所に高味あり雖然辮の敗に及び勢ひ逃れ術を隨に遂に良人と併びゝ又箭五郎も恁ぞ他い根生の騙賊まあ長兄の盤纏の多を知るに猛可は起り悪心を生ば損をうとも饒べ又小槌の実情を譬ば猴が狙公の為に勉て儛踏るが如し観者只管愛れども素より他が得意あるべし其情を知るべきの多人舌命の鐵屑に最怕べき奸賊に初よりて豪家の財を騙奪んと欲る伎倆あり福富一人に限るまゝ運ずくその騙術に無せられる人定に所以あり笠間五郎と云の儔に晩得で損せぎとも那奴に決して饒べ

況一千二百金を公然と掠奪る其罪阿保と迂遠の譬不只知らぬ俺が臆度の評る処かくのごし然いわゆるやと説誇ば朱之介うち領て俺に那奥を宿夏アとる恐と思ひ浅慮を和主の諭に高論に及べ凡作に横死に逃亡せし狡猾山客に跟られ命を其処に預に憐むべきあるとの景市尉に就鳥津の生死存亡の咱们も知らるれば他が観音寺に首途の折に咱们は佳と別に告辭の端に祝言に鬼息とのに古語にあるべれども後とのに夏に連係の崇を怕れ逃るべ盤纏の多に募ればも虚々と山客の為に死べ男子にあるべを那折に阿鍵に力自も小忠に共侶に就鳥津に横死べ菩提を吊れ事情の後に這里への傷痛べ是第一の異聞べ和主の汲に相見るこのべやとのへ景市金べ右も咱们に翌の朝船に乗て周防へ赴くと報べ朱之介に

鬼ども甚だ故を問へば景市いとゞ槍鬼のあるが如く書翰到着と這春の當所も温疫の流行病あり折ふし主管も小厮共も九名病臥たれば枝店の生活不便景市は游客なれば四個の小厮と共に毎日出船に乗走らせ由断なく来差有せよとの故に俺も亦速やかに帰る城藏這度とあらば咱們も猛夫に差れて三四個の猴子と共に翌の旦朔は首途の准備は既に整へる長兄の這首へ来まるとも一日遅くは再會の據もあり猶何時まで迄知るべからず料らず對面の欲びも盡さず間なく袂を分つ這便なる事何ぞ御新娘に告るは由なく翌は首途の早ければ起出らるゝ俟間なく這度を猜ゆるとの有理とぞ思ふ朱之介は困果て沈吟する上半晌ありて思ひ難き頭を拊て和主の豫知れる如く俺と黄金は兄妹の約束せれよりは相別れて久九年舊縁なる竭びて這里まで

おい俺はいえは本意なく什麼なるかと可らんやと眉根を顰めて相譚へば景市然とせず

笑ひ

と吸做を一個の粮娘も他は御新娘の意を悟ふて鍼妾も優を出頭咱們と此の情由あれば翌は夙めて起出て私は首途と目送るなり折他は長兄のうへを耳紀ホーあるを

さて奥へ通達致さるゝ澳路は橋を渡まで心長閑け俟も然とて隠るゝあるは曩は長兄が母と俱に周防へ赴くの折福富夫婦阿鍵の刃自まで黄金を長兄の妹品は約束と不要とて酌れ縁故は咱們が折々に出て噂とする月の美れは這里でも知らるゝの事

又只は這意味のまゝ姑嬢は耳疎く目も亦えたれば無竜で鳥を追ひ對天の母れ蒼は似たる廢人なれば黄金は秤を對面の折をまゝ影護紀と城跡へ親の少代まで放るもまれば後安は似れも親に過ぎて第一は黄金は對面は只一両度も買人と欲ふ東西整へ大和へ還るの事は真実なるべし又他事は密談は朱之介異議なく此は満面笑を含て趣あるを情麗は宜く頼むを

勿論女オハあるまじけれど俺が大和の杣木氏の女婿なり誰も秘しかくれ
意ある人は異姓の兄弟九人年以来相別れて再會の這一夕願はくば今宵は
俺與る商量敵はるあれど景市も愀然として嗟歎わ堪ずむかい長兄の周防
山只と首途の折ふ咱們と凡作と俱ふ送りて別を惜み今ハ咱們が周防
けば長兄ハ別を惜る呉ハ同士る中と辟く那里ハ劍の山口欲是より迭ハ發途て竟に宝の
山口とるよりある依前知ぬ人間萬事塞翁の馬の足樵と譬まる月ハ立て春も
春秋ハ富ハ後會ハ又いつもあらん那大和の人贅のみと誰ゆ知らん俺いとど
ら七馬脚露のみ辞を放ちて励ず朱之介の忽地悔りて然ん離合ハ必時あり緞
賢弟ハ周防ふ枝店を日ハ更れ也とも俺亦武蔵へ還去ふ
是より別れ舟行の無異を祈るなと祝ず景市領て碧の首途ハ伴侶あれば再別
告ずと曉けて立ん後會の折もあらば送れる意中と殷ふべ

主の轔るを倦れば夜ハ鼓ふ更ふ景市四下を探て扨も今宵を夜の短さよ
臭ふ乗せ長物語ハ更闌れば小厮們ハ饒されて就寝ふけ長兄も休らひ
たくるつて未盤を取て遽く退ぬ程ふ夜具を出て臥蓐を儲告別して身
子舎へ能る程ふ朱之介ハ幾番とふ欠びと述労して浄ふ立て墨本粘の屏風を
建輪と躰く枕を就ぬけ却説その曉ふ景市ハ五四個の小厮們と共ふ行装を整て
左更の港口へ赴ぬ周防へ還る船を附て西と投て走ける又朱之介ハ小夜深て睡ふけ
ば貧宿して其頭のるふ機会を日ハ高く昇て昼くも起出て肚裏ふ思ふ黄
金ハ對面せん折る些の土宜と泰間を呉ハ當座の黒付ふ其も何を贈る跡続も鉾も
高麗物も商賣柄を鄭まるん又玳瑁の櫛并白銀の指紙ふ皆高麗物ハ隷
く東西ハ珍げふ必ん要なるとと尋思して且早飯をたべる小後街衢ハ立
出て料帋ふ多ハ修善寺紙鼻紙ハ呉陸奥紙葦ふ歌繪と画ふ紙屑と共ハ

總て三種價を數れば三百一對皆極品を購求て檀紙に裹せ紅白なる水引の紙撚を締て名字を寫し袖に抱て遽しく歸り來つ又客房に獨なる漁路が出て來る欸とて起て立居て只儀不樂て果の欠伸に涙呑む睡氣覺しに隔亮を開て鄰坐席を見亘せば花も丹楓も浪速なる浦の苫屋の秋なる長き春の日傾きて下晡になりぬ浩然と奥の方より年十七八可なる一個の女子出て來つ是則漁路が朱之介にうち對ひ恭しく額つきて顏容なる長き日ぐらし。徒然にておはすらん景市主の徒々とのあれにはおん身のうへを具に聞知侍りぬ。獨那人のみかは賤妾が主も兒君もおはせしものを外々しくうち過して禮なき如くは奥と面亭と隔りて只そを遲くする故なればそは先さぞあるべく則より新奥さまへ申しあげ侍りしかど。驚かせまゐらせんと歡びの限りの什麽とおもひわけがたく義兄の君の來ませしは什麽夢にもあらぬや。吾も對面せまくほりせしにおん案内をせよかしと宣へせしによりて吾もおん迎まゐらせ侍るなれと生まうが如く朱之介が合笑みつ膝を找めて原來おん身へ漁路刀爺禹小顧て尊

是縁起爽歷咸兼知意もなく大いにめでたし。獨黄金の力自のみならず。おん身も亦俺爲に女弟とかふとも怪しからぬわざなれど這義によりて後々までも憑しかれ。就て這二裏を掛け物東西なれど上なる御新娘へ一箇おん身にまゐらする折敷を賃きて受取せよといひてなく賤妾はさへつれもとろ屬れし土宜の覡のみの最有がたう戴きぬべしと述てそろ件携て誘とかなる先に立ちけるにより友衞かひ熟けん長廊下なる舩底の板疊拭磨きて塵もなき春の漁路に引れゆく朱之介は既にして黄金が便室の頭に来にけり當時漁路は朱之介を程よき処に留置て走りて納戸に赴きつ那二裹を漆折敷へ其載て遽しく黄金の身邊へ齎して箇樣々々と披露をすれば却朱之介をいれて朱之介を扨合しうち咳きて徐に席に找入りて躬から黄金に對面を當下黄金は席を避て上坐に請薦るを朱之介は屡推辭て寒暖を述差愛を祝し則後の口誼細やかなるに黄金は羞て應をするのみにてものも難しと漁路はかなたこなたと精悍しく朱之介に茶を

出侯第卅八
朱之介
船積の宿
所の朱之介
黄金と再
會士

果子を薦めて歓待す。且つ朱之介に茶を喫せしむるに倍
たる美人ありて、ひとりの合の花、今が盛の楊貴妃の桜外に侍す。仲秋の鮮明なる月の壁言
ふべく、肌膚清らかに衣通姫の富士山峯の雪に似たるべし。清亮なる声音は、さながら迦陵頻伽の低
やと覚え、徐々として進止を覘へば、金蓮足下に閑秋と疑る。那神泉花の雨を禊ぎて歌を詠せし
小野小町も滋賀寺の車を駐めて迷ひを覚せし京極御息所も尚存命にて相遇へば必頻伽か
倣ひて正是月宮殿の女仙謫せられ、遂に下界の凡胎に降誕せしまゝ長く佐保姫田
る山野の神の楓妖花精と走らんに後宮三千の顔色のあらびなきに風流少女も見劣
とぞ目を瞠らしめ、且坂馬は朱之介に向ひ娼妓とのべくもあらぬ枝太とやらんを
醜郎に取るよりは、白物なる小縦過世の果報なりとも折て馬槽に活て眺はん
を。島許の娼産霊の神の衍怨和漢今昔不平の支美人醜郎を抱て睡り駿馬に知
んぬ。漢を騎て走る若れをも忍ぶべくは亦孰か忍ばざらん。憐むべし。とて返しに床の裏に

ぞ忍ばしむ。登時黄金は朱之介に三種の東西を贈られる。鈴びを述る語次に漏洩は亦
種々なる。愛に東西を賜りしを他も鈴びなる。母は歩行を恙なきまでも今は陸奥に
と称して、ひとりの奴を入れ景市力称に大抵なせあひけれ。程遠里のうへも果は夢の
心地して、恥しくも哀しく、その折りの憂やうとは、生れば幾十里距てひとり残し置く母親と
の心はいかにそ。今も今とて一日も胃安らぐ。とのみ朱之介は慰めて、その該せるべし。
壮なる者は必衰へ、貧は富得失各々時あり。咱は亦這八九年彼此と流浪して今とそ
落着ぞ。裏の母と共伴を逆けし周防へ赴くに。叔父なるあるべ母とも生別せ難難
憂苦は一朝に説聲ぶべし。公後東田に由縁を求めて一大諸侯に仕へんとの支故なり
遠さけれ大和に旅宿をなる。三年に及びて。並べられし烏許るれば俺は博命なれば
かれの過世なるべし。故郷に初る似ぎもあれ。佳き豪家の所望にあるべ。計らを娘婦とする玉
へ教びこれ優とあるべ。とのみを黄金は少なへ。も顔は緋桜のごとくにして紛るを神の

刺着き引抜てそを宣へまうとゝ家へ富も物足りても心に任せをヨメの返るを其日に
恋しのゝとの間に幾箇の女婢ゞる線ゆゑ出まを准備の湯美酒殽肴まで安排べ
たる漁路ゞ量酒ゆゑ盃を薦る賓主の席を改め管待て寧ろけれ朱之介の景市おの
ゝよりも出まを献つ酬れつ半醉ゆゑも本色を露して浮世雑談迷語秀句婦女子に
機を揽る辯佞利口ゆゑ艶語まで〳〵面白きれ黄金へ〳〵漁路まで赤面一笑に愛顧ゆゑ
樂しゝのゆゑ左右まる程ゆゑ這日も既ゆゑ暮れゝば菊燈臺の蠅燭まで光を増しる
孫客ゆゑ敷待ゆゑ半酣ゆゑ又々饌の准備ゆゑ漁路の時分をゝゝ辭て庖厨へ退り
しゝ傍ゆゑ人のとゞまりたる朱之介ゆゑ折をゝて寵ゆゑ黄金を挑ゝて黄金へ聽を張神ひく
おを浅ゆゑや何事ぞゝ人ゆゑ奴ゞ兄品ゞゝ調戯も人ゆゑゝゝ要をゝゝ穿れゝも朱之
介ゆゑ些も怯まをゝ生憎ゆゑ紆を兄品素より美知へ倘ゞ妹ゆゑゝ主あゝへ何
とゞまをゝ是表ゆゑ別れを及び折ゞゝの母れまゝれゝゝ欲良人ゞ妻を妹と呼べ

るゝ即女弟ゆゑ擬へる親ゆゑ由る故れゝ夫婦をゝ妹兄とゝも妹と兄の差をゝべ同胞も
るゝ黄金ゞ為ゆゑ後々までの後楯ゆゑ頼むとゝゝけゝ再會ゆゑ結び添てゝ妹兄ゝ天縁是ゝの
詞の識るゝを若嫌れゝ百秘の命もゝゝ惜むゝゝゝの心ゝゝゝ応をゝゝゝと辭
巧ゆゑ理るゝゝゝ理の柵撥遣難ゝ思ゝ迷ゝ女子の水性黄金ゝゝゝ心動ゝて文ゝゝよりも
形ゝゝゝ漁路ゞ饌ゞ来ゝゝゝ足御音近ゝ安ゝゝゝ朱之介ゝ墩ゝゝゝ故の席ゆゑ快
退ゝ夫くも酔て臥る像く陽睡と呼べも起ゝ登時黄金へ漁路ゆゑ寵義兄ゝ大く
酔ゆゑゝゝ姑く睡らゝゝゝゝ饌ゝ旦退ゝて這盃盤も取納ゝゝ客房へ昨夜のごゝ
義兄の臥簟を儲ゝと小厮ゝゝ吩咐て你も今宵ゝ休めゝとゝゝ漁路ゝゝゝゝ
蓮ゝ計ゝ朱之介ゞ身邊へ四折屏風を建輪て辭て子金ゝゝゝ退りゝ然程ゆゑ小
夜深て曉近くゝまでも朱之介ゝ起ゝて客房へ赴ゝゝ漁路ゆゑ黄金と倶ゝ宿通宵
相譚曉ゝ称明の比起別れてその身の臥房ゆゑ入ゝゝゝ噫女婢ゝ活ゝ人の大亞ゝ戸の童

子とらんとす。その非を知らぬのみならず性悪これ情を刻薄の欲を林ずる事なりとぞ朱之介浮薄なりと雖も又論ずるに足らねども黄金も亦是不貞の婦舊焦木の積るゆゑに火と土性の相生あり呂是のごとくもぞ朱之介と幼稚に生ず一所に育ち親深く千歴て再會あるに及び艶冶妖麗相歡び法嬢借さず會獣を寺に罪人とするとも朱之介夜毎に黄金と密會を送りその情慾を救ふをうらんで大和へかるとも虚黄金の為に兄品とのふりの豫ねえりもあれば遂に疑ふ城瘕日毎に屋敷巡りを暇なれば徒べとに出もけぞ這他奴婢の防御ゆゑ演路を進退脱落くその身は常に黄金の臥房の次房に宿ければその姦淫を相資けて些も外へ露ぎ原這演路も景市と密通をる情由ある故に主の與へるを為ぞと念じ如へ相計ける程に有一夕黄金の朱之介に向ひ豫微めの那唐布のまま入らぬ東へ還らんと懇ま相遇て後の別を爭何せん然りとて伴れて奔てをを出て呉ぐ故郷に在る母刀自のさを歎せあらん不義と不孝を身に駄てる危浮ぞ三年ぞ三年ぞ三年ぞ三年ぞ及ぶべからざる悔ともいそぐ及ぶべからざる夜なれば共侶を東へ奔れと宣へば左右なく義を引きぞ一に陷むちのあれば徒れば這番は且相別れて遇ふ日を俟んのみ就て預けまゐらせんと思ふ東西佐ぬ人見を認めそとなる狡とをいて躰て肌膚守る裏と合ぞとも狡ぞ玉を五顆の玉を鼻紙基ぞ忍ち無せて喃末主宣裏は這玉の失せ折ぬ身の母れる怪不思議ぞ返へ奴ぐ秘藏の東西るをとらまぐ玉れ偽ぞ狡仲予化ぞ一日隻時も身の放さぬ今這玉を三顆分ぞ身に預けまゐらせまぐも奴ぞと思て夜も日も身に着て喪ひぬ玉ぞ思ぐ奔やく妹と兄の縁を其処に結べ。その誠心をとるまぐ親とも身とも思ぐる伴れて行かぬ。

意と云へるふ。ことの返へつて耳ふ示して天下好きふ任せ。朱之介の感ど能はず。壮裏ふ為
ゆ。俺ふ為ふ夜の私語ふ黄金ふ倶して走られと云へふ素雪ふ非如納得せざるも
只今ふ為ふ其ふ便ふ。公ふ後日の約束に他ど愛ふ玉ど分ちて預けんとへるのそ。その
実情ど知るふ足れり。俺且武蔵へ立ちて那里の首尾ど繕ひて事ふ假託け再来て。
折攫ふて物ふ是ふ優ふ分別ふて尋思すふ領ふ。這玉の内
ふもの俺来まで俺よく知れり。ふ内の愛ふ為ふ。ふ後曾の識ふ
とて預けらるふ。ふ真実ふ内ふ思て肌膚ふ着て念ど後の便着ど俟ん因で為ふ
這番ふ獨東へ立ちて又出ふ来ふ。ふ一両年ふ過ぐ。ふ五色の玉殘彼
此ふ撰て三顆ふ為ふ含て白と黒ふ陰の色黄ふ土ふて又陰ふ俺ふ三顆ふ預ふ。
迹ふ送ふ赤ふと青ふ則陽の色ふ。ふ咱ふ仇ふ諭て躬ふ件の玉ふ。ふ持
る虜附の護身嚢ふ斂ふ。這夜ふ雨の蕭ふふて迷ふ難ふ睦詩ふ。ふ鼓ふ過ぐ明

るふ易ふ別ふ惜む情慾ふ安漕の浦ふ曳く鯛ふ。ふ城蔵竟ふ襲
着て娼ふ限ふ。ふ有一日澳路ふ窟ふ召て目ふ睨ふ声潜ふ。ふ澳路俺
今汝ふ問ふ。ふ嫂ふ乃若朱之介ふ夜毎ふ臥房ふ抜ふ。ふ忌憚ふ。ふ樂ふ。ふ汝ふ妖
せ。ふ俺ふ主人ふ次男ふ親ふ兄ふ留守ふ預ふ。ふ身ふ太役ふ兼ふ。ふ国ふ潰れ。ふ不
義淫奔ふ。ふ始末ふ知ふ汝ふ俱ふ饒ふ。ふ兄ふ為ふ妻敵ふ討て怨ふ雪ん。
悪ふ告ふ。ふ勢ふ猛く責問ふ。ふ澳路ふ顔色ふ如く駭怕て一句ふ。ふ免さ
せふ。ふ城蔵呵呵ふ冷笑ふ。ふ俺ふ憤ふ徒ふ。ふ
又汝ふ挿ふ。ふ主ふ拯ふ。ふ身ふ恙ふ段ふ。ふ初ふ。ふ嫂ふ執ふ。ふ
む。ふ左ふ右ふ兄ふ東西ふ他人ふ賞翫ふ。ふ俺ふ賞翫ふ。ふ俺身
朱之介ふ先ふ嫂ふ臥房ふ潜ふ。ふ本意ふ遂ん。ふ折嫂ふ不美知ふ字
だふ。ふ汝ふ俱ふ覚期ふ。ふ命ふ。ふ又嫂ふ美引ふ慰ふ玉

つゝび朱之介も半分譲りて一宿代りに嫂に向はせ俺が安らい神うけと亳毛ばかりも思話
ゝ。汝の話と嫂れは談じ首尾整へて命を助られ困ると後悔さるとも飽まで權懲
さゝ。漁路は慌迷ひ。言葉々々退く。黄金が側に人を折る城藏よられる。綷の趣箇
様々と報ふ黄金もち驚いて困じ今ぞ謀の為所を知らねども。まゞ目の暮ぬ
朱之介を招いて商量さべくもあらぬ。王従共に泉を問て左さも右さも思惟るに才に智
略をいろけ。黄金に漁路に耳くもう那城號の難題を聽どとのゞ俺のこゝろ汝も側
杖打るべ。その殃危を脱れんに汝と俺身と臥房を易て今宵竊に睡るべ。願ふ汝
俺が身代に謀りて那人と一夕宿よ然ばこそ昔の忠臣義士の為らぬものとは言ぬ
義を頼むと他夏もゝく拜ぬまでぞ。日説けば漁路は眉を顰て。綷の難義を知り
ぐ。推辭ぞう忠を義を。ぬるのに仇られども。その為ぞ。とふ黄金は
あへ。汝が渋りて美引ぬ景市と情由あれば。ゝ其頭のも月来日屬知ぶるあれ

ども知りて。ゝ面色せ。汝を愛ぞ心の誠然とぬで主の難義を救へとゝ今面
前に伏とれ死ぬ。鬼ゝ心と知て早晩汝の與に外視御ぶてひとの真に
益せ。悔よと涙吐々怨ぶ漁路は困じ。ぬ。ぶ。ゝ嗟嘆と。ぬ思ゝ
左も右も考へ。ゝ。ゝ。と勧解れば黄金は欺ぶ。ぬ。ぬ。ゝ景
號は。ゝ日に周防の枝店を支て這里に在ば那人と宿るも後安ぶ。他枕を
易ぬとも。ゝ。任せ。ゝ。任せ。ゝ。迹の減ぶ。術よく謀て
城號に努力暁得られる頼むぞ。然ば任せ右さへと謀合ゝ主従の密談數
刻に及ぶ。憶ふ蛇。その性淫。ゝ大内義弘の燒亡せ。蛇に大小あり。煙の内に顯
きたり。任れば城藏漁路は。亦那小蛇の後身欲薄情ぶる邪淫ぶ。

第三十回

国門を関して荷三太客を逐ふ
妓院に宿して朱之介禍に値ふ

然程に日は甚暮れて這夜も既に時移りて音四との鐘の響くにぞ。淡路は黄金と約束せし錯へを奉て臥房を看て宿ざれと見る程に毎ゐはあらで主人の妻の雄波が猛可主所要ありとて人を呼せ来ければ折ふしの見へざるにて罷へ出てとにあらねは走りて納戸へ赴至しを雄波は招き近つけて喃淡路申夜過されば夜務は退て去ぞ就枕でもあるべしが雲時肩癖を散手て給黄昏比より小女子们に迭代に擎せしかども小腕なれば此も利ぬ果は孰も睡臥て物の役に立ざりし。御新嫁に使るを竹を召て夜深しに俺身の按摩を執らさる最も無心の所なれど且く頼むと他支もなくいはれて淡路は推辞によしなく。そそと身を御用に役る賤女も指頭に力なければ肩あるに稱べくもあらねども抓を療治に疲労なくまゐぐ。且阿肩より初めらん先さゝせ免へと仰し寄て擎手に肩癖の名拍子も人を知ぬ間の云る今宵の其れ胆向ふ心なれに掛りても天せん術はあらで肩の機轉利る程に指りては立るに立れざる程母の腹なる有髮なる易く死脊筋徐に拊降せ灸灼の潰痂這頭焼と見ば避て右へ引く。

七命九ト世ニ云ハ命ノ所ニ七ツノ所九ツノ所ヲ云ナリ急所ニ拾所アリ俗ニ稱ス当流ガ書ニ見タリ

七の命九の命苦の世界に十指の運動を暇なき十二三より使れし根柢の主と宅母君の所要に小夜の深ぬれば那約束は脱に做る穴所も知らで章門の出し後れなるらんと氣さへ心を揉勝なる手前勝なる人慾の私雨はあらねども外へは洩ぬ鈴の間の土圭も胸も狂ふと知らぬ雄波は笑しげに喃淡路太義なるながら肩の軽う覚えて重擔を卸せし心地ぞする今宵は睡り目易らぬ憖なれ附も寄る間ごふ似気れども面亭に在る逗留客の朱之介刀祢ちらんは黄金が為に兄品の好さあるとかよしや縁も偽かなるに黄金が對面まへと向れし折なは氣も屬るぞ年来疎遠なるとても義理ある兄公の来ませしならば對面せるは勿論宜く管待しあらせと允せし哉允せしかども逗留もあまりに長くの桟太郎も家老爺も周防なるせのはひなる旅宿れ留守のなれば其首に女オはあらざれど親を過ぐ伇義番も對面へ入らぬの甚麼ぞ黄金は介後も兄公に對面まつる寂と向れて淡路は報らなる。額は聲者ふ見えねども片輪

車も心あれバ裏く胸の苦しさに推も緩む迹戻り言も訥く姑く答難し欲気
なく古那大和の阿客人ハ商賣用の多かれバとそ彼へも此へも赴くのハ宿にゐますハ稀なりと
えーハ現今ぞはらん新奥さまへハある日に對面をされてその後ハとかくも雄彼ハ耳疎ければ
屡あへせうち領き欲ぞなりにまでせられましとあよれバあらぬ人達の心つくまくなれバ今もあら
ん然とそ却今も向ひしえ序次もあらバ御新娘に俺身が恁々ならんと報らせもけしらバあら
ぞ夜ハ深たらん休まれかし臥算ハ甲夜に布しておる俺身ハその尽就枕りそん火の用心を
頼むぞや太義々々と労ふて艱てハ遅ぞ身の暇漁路ハ些ぞ吻とつく息の白雲りに冴ね
る鐘の音も拍子脱して立つ腹を横に臥さして横りけて告別て遽しく走る外ハ憚りに竊
歩して尽に黄金が便室にぞ赴ける却説黄金ハその甲夜の間よりいて衛よく城蔵を
欺んとのミ思ひしかバ二更の土圭の御音く比連ハに漁路を呼びしかど他ハあらで一個の女婢が
漁路ハ目今納戸へ召れて老奥さまの肩癖を敲きまゐらせて侍るとい答ふ黙止して稍久しく

等どもまちども出で来ず今もあれ那人が潜びて来るハ争何せん非如俺身ひとりも漁路が
臥房へ避るも伏りて這里に宿もあらバ何ぞとて那人の手を牽ひきて去べし這里
と那里と近ければ躯をとも見出されん左や右やと思ひ難て安からぬ胸うち騒ぐを
鎮んとて衣引被ぎて臥て有る浩処に城蔵ハ御宥に漁路を酷く権して今宵をんとおもひしが
他が必黄金に報て縡のあらハるを懼さにまうして彼朱之介に先をもて日屬の相応ひを遂ん
ぞと尋思をしつ人定なるその夜亥中の比潜やかに黄金が臥房に来にければ黄金ハ吐嗟
と駭きながら声も立ず怒に乗て殺されんとおもへど有繫に物のおそろしければ身を
縮して息もせず城蔵ハ這光景を首尾よしとほくそゑみ合笑て横の内に這入にける噫嘻園
房の濫中冓の言牆に生る茨は似たり払ふべからず説くべからず説べからぬものを説く
則小家の珍説も勧懲を示すに在り姦夫淫婦の恥を知らざる人形にして獣慾する
あの那一隻の牝狗を逞く群狗喘ぎて乱走まはると又安ぞ異ならず現容共に美人にして

更皇外上面
如蓋其陰内
心如夜叉
その趣大同
小異悪い
所云醜悪

心の悪女を見れば美女の美を人食へれば心の醜人ふそれぞれの所なる所の美悪を
見えざる所ふ美悪まるる類と美悪を心ふ擇まば疇ふ黄金の美と美を誰ふ黄金の
色ふ迷ん便是張文成が遊仙屈紫氏の源語の餘説と舐ふ時好ふ筆ふ曲るふ
あらぬ看官あらずやあらずやあらば作者の辯を俟ずして明の醉を醒まあらん狹間話休題
再説その夜夜叉澳路を盗く子二刻柴納戸より退散来て黄金の臥房ふ入らんとせ
ばあらいふ何の間ふ黄金ハ既ふ城藏と枕を並べて臥て寂まり死る今ゆゑふ
なるもあらざる
なるも其首を退散て次の間ふ入て見まる今宵ふ限りて生
憎ふ納戸へ召れて更闌るまで引き着られてあり一刻那約束の時刻後れて心ぞ
さぞの御難に遇せあらけん俺身の役と免れ難く欺く欺く似られぬ人甲非文もあく性を做せ
怨ぞあらん鈍ぞ鈍ぞと呟ける。と腑を噬まぞ悔ゆと祐る神ハ受けれども祭渡り給ふ
鎖神輿と安措て睡一睡翌快起く賠話せん。と兵べ帯を解捨て躺て枕ふ就ふ

けり。怠り一程ふ朱之介ハ夜毎ふ澳路ふ喧騒と黄金ふ臥房へ忍ぶ。這宵を
小夜ふ深るまで絶て音ふ聞ざりしかば。と俟不樂て睡らんとまるふ宿も寝られず。
と思惟るふ黄金ふ臥房の頭ふ澳路を宿るの者ふ道引き夜来と異なり。
他ふ聞く懈ふ睡ふ疑ふ。居宅の内ふて這里と那里ハ遠くもふ
廊下伝ひの案内ハ他ふ縁ふ俺ふ知れり。真夜半ふ過ぬふ今宵と空ふ過ぎん
やと。ひとり焦燥て情慾の怒むべもあらばれば。横撞遣ふ起出て廊下を過ると例の杉戸を
そと推ふ隨ふ開ふ其処ふ潜び入て黄金ふ臥たる枕方ふ屏風と聊推開く。
進ふ入らんとする程ふ見れば見ふ見るも既ふ一個の男子あり黄金と倶ふ臥ふ驚ふ
ば遠火光の刺ふ便ふ熟視れば這密夫ハ別人ふ主人の三男ふ成義ふ成ふ
立くも心悪くも鈍ふくも。この娼婦と堪ぶければ抓着ふ思ふ俺ふ俺ふ東西ふ
他の妻の重夫累ふ毒ふ。ふ。ふ。と捉ん理ふ。ふ。ふ黄金ふ情由を問ふ。ふ。ふ性起ふ不覚を

と
取るとあるくんと深念をして阿容々々と外面へ退いて惆然として又呟ふ那城藏が俺ら先ふ
嫂と情由のありける狡大緊い然もあるべ俺と黄金と情由あるとは那奴が誰ぞ知らぬ
這宵竊ふ援駈して不意ふ起く短兵急ふ攻着て竟ふ兼取りけん宣定ふ夜襲ふ城
藏が陣法智略の素速さよ若果して小らん中ふ黄金が実情あらねも他が意ふ任せ
ぎる事の敗ふまらんかと。俺が為ふて後ひけの漢路ふ問ひ是迄の意味の具ふ知るよ
あるべ。と呟くうちそが俄ふ又次の間ふ起いたれば漢路が熟睡して揺覚せども毎よりも遅
く臥くる睡端の春の短夜食宿く青年女子の癖ふれば仮まるべふ夢ふろ時程まで
覚ぎりける。寝良と熟ち目成ると是と黄金ふ比ぶ二の町過ぎて三の町四月初旬の初
堅更と五島鮪ふ似れども黄金が既ふ先客あり。這宵ふこれを反代雛妓ふて空くして
客房へ出能りて獨宿ふ優ん原景市の情人ふれが亦是縁ふ依て生ふ有ぶ。ふ成
済度して持ふせんと腰ふ計較む浮氣の悪性行燈を風と吹滅して。その懐ふ入るべ漢

路ふ忽地駭覚て城藏と呟くいふ鬼ふ取るふ地して金と此ふ声を汎立ぶ然るふ
ふ。ふ。這宵の約束品鮪して城藏主が既ふ。新奥さるのあん臥房ふ潜ぶ
と共侶ふ宿のひゆえと呟いぶ鈍や夢ふ。ありけるふ狡のれのの夢ふ這里が俺が身の
臥房ふ入替りて睡りけ小らぶ城藏主の新奥さるぶと呟いぶ違へ。ぶ方ふ
来ぬ。ふ。御高ふ免れて嬉やと呟いふ空馮ふ。竟ふ脱れぬ腐縁ぜん術る。と
覚斯ても呟ぶ怒いふれが朱之介ふ知ぶ。空ふ枕を並べ天の明る比ふ。ふ城
藏ふ悟りふ世ふ亦倩ヨスふ艶冶郎ふ朱之介と結ぶ假寝の夢ふれば。
覚ると惜と呟のと知れども知ふ面色と後ふ。ふ。秘と黄金ふ報ぶ是
より城藏が朱之介と一宿替りふ黄金が臥房ふ暢ぶ此彼共ふ解怠ふ勢ひ
いくのでくれが黄金が朱之介ふのと人會と欲ると古九ぶ壁言ふ河夏が佛生山ふ夜
行太黒藏二名の賊の耦配の妻ふせられと左右ふ媚る為体ふ相似ふ。ふ。ふ。

邪邪淫婦恥を知らず。白物仁の癖なれば城藏と朱之介が盧々と和睦して交の柳巷を相伴ふ嫖客を異わらず迭に秘密を探る閨房の秘密さへ隔なく公然として相譚に日毎に肴に酒うち飲て夜に淫樂を事とせしが朱之介が盧々と大和へ還ることを忘れ城藏親の外代に生活業をうち忘れ。莫逆知己と唱るのを家事理らず眞実に成り胡慮まるの公事情を原ふ城藏が朱之介と忌嫌ずして親きを忘れ他が黄金と情けの由あるよりその破隙に跟入て謀りて本意を遂るに俺のみ獨竊せんを強顔ならず黄金も恐れず俺が自由にならべし一宿代りに他を讓りて迭に慾を分つたる黄金も俺を女子にせず非如世にも強御食にも生涯よく畔を讓りて竟に一畝も失ぎるに諺に似て俺に利あり。倘親兄に這事を知て發憤あるとも其の折に朱之介に口戍開せず添言有る活路あり。と尋思して後々までの忌まず婦人又朱之介に是より先に城藏が古文の趣を黄金に問て腹に立ども今ぞ他と長短前後を爭ふたる俺が事敗きて黄金と長に別れるべし。黄金が他に従ひ俺に別れんとの惜しに俺に任せ。

拙言言。是実情の致す所且く城藏と和睦して一宿代りに餌を養ひ他を望足て俺が身の為にすることあらん。宿遊女に壁言して他に客を呼れ間夫を娼に倒に胸陝に所為なるべし。と思ふれば彼れらのよりも黄金に其に形のごとく相計陽情なるに城藏と莫逆なること左右なる程に春に過て胃に干涸なるに黄金に未子春の比なるに二八月月水を出て乳頭の色も黒むに懷胎なるべし。と心に樹に朱之介に耳に報く。倘有身なれば良人の旅の単身なれば。

ひとりぐらしに所あり。什麻なるに問に朱之介に問に。

月足て出産して桟太郎に還らば塗言有べし。倘又久に還らば城藏に面目なく。

竊に陰胎を知るよりも俺に亦然なり。実に俺が子欲城が子欲正に知るよりの他に亦然なり。

の骨を折るに恩でもなく。苦労に成べし。とも易に慰めて此も横合せ

左
荷三太一姦夫を
のて一姦夫を逐ふ
右
九四郎途ふ
朱之介を伴ふ
出像第卅九

相随
皆配偶
共戯
各優悠

なりけり。然程に主人船積荷三太ハ今茲正月の初旬より其の子桟太郎と共侶に大内家の城下なる周防山口の枝店に赴きて逗留既に三四个月快くも還るべかりしに那里の主管小廝们が流行病に犯されて久しく起も得ざりしに剩桟太郎もまた病症にうち臥しけるも一月あまりやうやく四月の中旬に既てて主僕瘥り果しが初て進退自由を得たりしかの故に左東より景市並に小廝们を三四名召とりて其の闕るを補ひ此枝店の小廝両三名病痾によりて親里へ遣し店へのみ還らざれば身まかりするもありければ景市よりも及左東より来つる小廝も枝店に留めて荷三太と桟太郎は左東へ還らんと欲せるに桟太郎は幼稚なる比より質弱く病ありけるが今又病後のことなれば陸路を便輿にて還れとて他の従者両三名を隷て前日に起行せ荷三太は左東よりむかへに来つる従者と才に一名を随へて浪速へ赴く海船に便りを求めつつ乗て浪路を風に儘せ前日無く順風なりければ歌舟なる雲の稀なるよりも甚く速に左東の港口へ乗着しは肆月廿

六日の真夜半比のことなりけり又桟太郎は初旅の事なれば親と立ち別れて獨自由ならぬしが這里に立寄那里に憩ひて専遊山翫水の為に日数の後るるを迎へ人を出されけるやくれしくかへり着けり是より先に荷三太は港口へ船の着し時真夜半なれども居宅まで五六町ほどに過ざれば又那従者一名をつれて宿所へかへり来にけるに小夜深ければ熟睡せるん奴婢们を呼び開せて潜かに背門より入りて雄波に対面せんとするを黄金は城蔵にかへりしよしを知らせぞ候納戸に就寝りける詰朝快起て早飯を果せし比且家黄金に対面して桟太郎も恙なくかへり来ぬよしを報んとて黄金が便室まで赴きしに昨夜朱之介が来て夜を暁しけり私語に些も睡らで明さんとしけるが黄金の實の人倫睡をし比なれば好ぞ倶に熟宿してけり既に天は明日の出て窓の戸節に刺る影を枕に受てもまだ覚ざりしを知らねば荷三太は這光景に快き青年女子の癖なれども咱们親子が長旅の留守に朝宿ゐなしなる事快覚えとおもひつつ黄金さまと呼びかけて建たる屏風に

て、手を撫て二折許り所で、これいかに、ひとりけるゝも黄金の一個の後生と枕を並べて臥るゝ者の時俱に驚き覚て起んとす男女齊一に歎や主人と面を照火と怕慌つ避易して朱之介度々喪ひ吐嗟とぞ平張俯き黄金の透さを横うち被て頭顱隠せど凡癖の云に科を粥もゝ絞びけゝ寝間衣も繕ひ兼て大難義折もあり退の鮮に形らで穴へ入ん狭と思ふの身の置ところなりけり偖ては荷三太の素より思慮あり老煉の者は堪忍を上目とし駭に驚も怪めぞ奉て屏風を引輪ら七日足を不退ゝ躰て納戸ふ立籠り妻の雄波ふ対ひて這留客の有やと問ふ當下旅の朱之介が支の趣任々に語つる隨ふ報知と那大和の商旅ハ黄金が為ふ兄品の舊好きのあるとあれど對面ハ只一度の三日毎ふ彼此ふあるとて宿あり在ずと答ふ伝へ荷三太冷笑て目さへ耳さへ疎に渾家の何事ゝ知るぞ身の正直ふ比べ人毎ふ皆正直ぞと云ば不覚のあるんそ城藏ふ問ふ呼れと嗟ふ嘗鳴ゝ城

藏召べと呼せけり然ハ程ふ城藏ハ昨夜半ふ親荷三太の帰郷と夢ゆ知ざりふ今朝ハ未明ふ呼覚されゝ起ふ出ぞ俄父ふ對面と留守中の所要ハ流損益と論じるとの子舎ハ退ゝふ見くゝ又召れゝ走て納戸へ赴ぞ荷三太身邊へ招ぞ城藏ゝ黄金が兄品の朱之介と後生が大和より尋来て久く這留せるとぞ何なるの故ふ三四月留ゝ大和へ返さるぞと問ぞ城藏ハ那人ハ一百反の唐布も買るべく沙金もまく見せんと柔ぞ這里へ来つる人ゝ知せゆゑ唐布ハ船間ぞ其の數足ぞ入津の日を候ぞ這留遂ふ今と及ぶ勿論嫂ハ兄品ぞ総角の比母親と共ふ福富の宿所ふ居ふ後他郷へ赴ぞ陳遠ふ過せよゝ

るれぞ又尚且の客人ゝ来れ生ゝ存ぞ居ぞ其の意ゝ任ゝ居ぞ瞞ふ荷三太ハ此ゝ頭ぞ居ぞ生活の為ぞ家ふ妻子もあるぞ長這留ハ要ぞ所彩ゝ況今ぞ唐布の新渡ゝ荷ハ敕ぞ縦何時ぞ俟ゝ望の稱べも

あくねば這奴と報げけく速ふ出ー遣るこそよろしかめれ。然とも那人疑ひて還らじといひぜんかねあり。畢竟和郎も由断べからず。困ゆる思ひそとゝろあらばけ吩咐れい城藏い痍の口上の膿も抜る心地して痛入る親の裁断倘俺がうへさ知られいせざるべと思へど色も顕はさい阿嗟々々。と言美しとその夕の子金ふ退ぞる。朱之介と密謀ふ招じて只今親ふられ趣箇様々々と具に告ぐるその夕必謂めべ。親父爺い昨夕真夜半比ふ船着ぞりとそ還られぞる。小ふ嫂けい今まで。昨夕の仮ふ起ても出ぞ。女婢們ふ詰ねーふ持病の積りや発りふけん。とぞりらそ誰も沼ぞるべ思ひ合ぞるいるぞと。問れて朱之介い慝ひまとう。ぞれべとその夕ぞれ今朝も咱們ふ黄金さ例の時刻と宿送れ。日の出ぞるまでありける程ふ。鈍や親父ふ見られぞるその為体い徒ぞるぞと今日ぞて真ぞ示ぞの折咱們い親父と知らぬ。黄金が目注で諭せーべ。撲仆と逃んいまぞるぞ。これやもあ〻悪狽て。活る心地もせぢりーふ罵も外めぞそ仮ふ。親父の退ぞるひーべ透ぞるうと脱出で。客房ふ立ぞる来ふけれど左ても右ても這里ゆるとも

もぞ逃去ぞるべと思ふのぞる那唐布の一奴もあれば。和君ふ商量ーて後ふと思ふ入とあり。けるふ逐出さるのもふーと支治べ且めでて。ぞるいあれども唐布と沙金の二種ふ入ぞるべ。大和へとぞいい還らぬぞるべいるふせまーと陶惑の密謀ふ城藏又駭ぞて。それぞ事い稍解せ。ぞ。然のみ思ひ屈ーのみそ沙金のみい今でも易ぞる。唐布い新渡ぞーと親父爺のみーいぞるべ。ぞるべ。哥々を出ー遣るぞ為の搗鬼ふ城藏ぞるべ。程ぞく船の入ぞ思ふ左も右もとまぞる。せん哥々い這里ぞる程遠ぞる摂津州住吉の社頭ぞる。岸松屋と思ふ客店ふ宿易ぞーて侯。那岸松屋の主人ぞ咱們相識ぞるねども。その名い這里へも伝へぞるべぞる。今その旅亭と定ぞる後日ふ音耗せん為へ這奴と云ぞれのみぞる。と世ふ憑ーて慰れべ朱之介いぞる。ぞるべ。ぞるべ。趣ぞるべ。黄金いいふぞるべ。と問へば城藏沈吟て。哥々のうへべふ善思ぞれ。親のぞるべと推量ぞるふ兄桟太郎の帰郷て侯。離縁て唐ぬて親里へ還ぞんとて思ふれけめ。その夕も安危の定ぞる日ふ俺亦ぞく報ぞるべ。とぞる朱之介い歎びて。小ぞるべ。

且宿易と急ぐべしと耳元果て遽しく客房へ退出て旅行の打扮故のごとく特あるべく
とのべ。さてあるべきうら。うれつげ。さて〳〵。あのでの立出るの旦夕の後城藏の寵れ居れ
敷。整て却城藏もふ別を告て浪速津投く立出るの旦夕の後城藏の寵れ居れ
陷て黄金ぐるみを奪ひ絶け猥褻がり行業動せ。俺丹ひ美日あの朱之介口い一
人を損代ふ出せ。ふのうへも亮造化と呼ひふければ後々恵縁おのづから理のて制せられ
どの擣ふ閲く外の侮りをうけ。遊莫黄金へ初よりの実情をそ城藏ふ西路ひ一契
ひふあくれぞこらのふへ倒ふ物怪の世ふ似れども心ふ知る朱之介が生て往方と身の又後も
測りがたい男の胸吉伝罵りもせず外ひもせねど面目もなく衒心ひも釋れぬの朝より持
病の積ふ假托く臥房笠竜ふ長旦を消し難て不樂ふ壁ふ向ひ伏ぐとあり人疲
倦れて苦しくも吻と吐く息ふ雲と為り雨と降ふ夢の跡結びも果なく妹と兄の山外恵と
敷。そはさておきて。ふたびとく。あけのすけ。ちくしの。邪淫の為ふ家
敷。そ方。案下某生再説朱之介晴賢ふ左界ふ杖を留めふ折の可くて
路を忘れ虚々として在りける程ふ竟ものの發覚れて主人船積荷五大ふ逐出されて

又ふ進退其首ふ谷りを城藏ふ云云と慰めを心當り且携津州を退去て住
吉と投てゆく程ふ肚裏ふ思へ。俺唐布を買ん為ふ左界ふ杖を留めふ折の可くて
ふ入る。されども春より三ヶ月の儲債あるを取られれば。金ふ故の仇を。報ふ裏ふ
あの大和へかるを克ふ武藏へ帰参あるべくとも旦足ふあれば往さを毎ふ四海皆兄弟へ
又馮心を友達ふて来て落着く処のあるもせんそを已ふ心ふ為を。俺が本意ふ
ゆるれば且城藏が意見ふ任し黄金が安危ふ多知るべく唐布も買べく買べく
大和へ還ふ不如。与平思へ与急ぐ程ふ。住吉ふ半里ばかりもあるべくんと呼ぶ物欲
ふくうしろの路の傍ふ村落酒肆ふ立よりそ尻撰酒を喫ふ。酒肆の主人と見
ふ入て公羽ふ向ふくほ。あるあり。住吉の社の頭ふ出岸松屋との客店あるを問ふて主人を
頭を傾げ那社頭ふ海船の宿ふ客店ヨヽあるあり。岸松屋も姫松屋も有と云ふ
あるもせん已ふ多知ふ。とふ朱之介ふ疑心起りそ。云云と諾る折後の登ふ尻を

掛て憩ひをり。一個の男子あり。朱之介を呼びかけて、客人咱們は住吉の人氏、大柳何某の所要ありて、山岸松屋を問ねるぞといはれて、朱之介は駭きながら、急にその人を見るに、身長高く全體肥て、面は薄赭色なるが、年歳は四十有餘なるべし。身には仁田山紬の大縞なる夾衣に、皂紗綾の裏衣領をかけたるを被て、二領ながら襲着て、腰には白金の革帯あまる苛物作の長腋刀を横佩たり。若是角力士にあらずは、必地方に名の聞えたる俠者なるべしと思ひしかば、遽しく會釋をして、原来和君は住吉の里人でおはする歟。咱們は大和の旅客なるが、左界の所親許赴きて、目今はかゝる人に約束せしことありて、その人を論く住吉なる山岸松屋に逗留して、五日耗を等とおもひしに、その旅店に宿を投んとおもひしが、不知案内で心もとなし。とあれば、且這主人に問ふといへば、その人頷きて、しからばこそあるなれ。和主知らざる所あり。那岸松屋は年々に活業おもはしからず、衰へて借財多くなりければ、償を償ふに克わず。その故に家を鎖して門に貸居の紙牌を貼出し、外の借屋へ轉

宅せしは、一昨々日、四五日前のことなりし。と云ふに、朱之介は駭歎して、そは亦的が違ふたり。約束せしは岸松なるに、外の客店に宿を投て、使と申使の索るぞ、遂に届かざりしなるべし。さてもとばかりに困じ果たる面色なるを、件の俠者は度もあらで、しからば術あり。咱們は土器屋九四郎と喚れたる地方で二の俠者也。那岸松屋の舊宅の東鄰は咱が宅也。西鄰は空地なり。あなたは岸松屋を訪來るもの、一人としてあらば、宿所に立より、その使が往方を向はる。咱們を客店なりねども、けふより和主の宿をすべし。然らば約束せし人より異日に使を來らしむるも、索當ざるなからん。その義に従ひ給へと、推事なりける俠氣のよに、漸くせまて朱之介は兼数ひて、そは然りけれども、我等が好意にまかせられ、晩生は大和なる上市の商旅にて、朱之介と喚るもの也。冥く計ひ給ひかしと、頼めば九四郎異議もなく、然らば咱們と共に居ふ日の暮れぬ間に急ぎなん。這頭に所要ありて來つ。咱們が家に酒を喫んとおもひし随に憩ひたりければ、誘ひ給ふや。快くと急ぐまゝ、朱之介は遽しく酒肉の價を主人に取らして、菅笠引提て九四郎が後に跟きて出にけり。

低而十三屋九四郎ハ朱之介ニ伴ひて。あく宿所ハ女房乙藝ハ怪と朱之介ハ
ヨく告ゲ乙藝ハ躯て朱之介ハ福寿ハ休ハ七茶ハ看め饌を羞ハ最丁寧ハ管待
けり其夜より日ハ朱之介ハ主人の進止ハ怪て知らぬその活業ハ櫛挽ハ店舗ハ職匠西名
ハ皆乙藝ハ任用ヒ九四郎ハ活業ハ目ハ年来地方の後生們の頭梁ハ立ち
まで聞評の打擇夫婦の離別ハ人の子の勘當ハ和解て舊納ハ色ハ任ハ
しハ宿所ハ在ると稀なり。然程ハ朱之介ハ九四郎ハ侠氣ハ主せられなる二旬ハ
あまりいとど城藏ハ浮ハ赤音耗ハ走ハ狐疑ハ安ハ程ハ
有一日九四郎ハ咱們ハ嚴嶋の辨才天の百味供の講頭ハ翌ハ船路ハ安藝ハ勿
論和主の逗留ハ何時迄ともけりあれと商旅の為ハ本銭も盤纏も多ハ懐ハ
金ハ咱妻乙藝ハ預けぬ仆ハ実ハ咱們ハ這里ハ非常の怕れ
けれども旅宿の留守ハ他郷の客ハ侮るのあるの恐れ故ハ我及ハ朱之介ハ

肚裏ハ思ふ。現這主人の侠氣ハ悪心ハ然ハ凝ハ所藏の金ハヨメ
ハ偽て預けぬ夫婦ハ賊心ハ殺ハ思ハ倒ハ後
安ハ思ハ一説ハ及ハ心屋蜀れ親切の欲ハ逆金ハ九四郎ハ預けり九
四郎受て數撿ハ百九十五両ハ初沿葉ハ朱之介ハ遞与せ金ハ三百両ハ三両
京師ハ左貫ハ路費ハ贈東西ハ用ひ今盤纏の為ハ三両送と預け登時九四
郎ハ女房乙藝ハ身邊ハ召て綜低々と言ハ金預ハ実ハ寫て朱之介ハ遞与
ハ眼前ハ件の金ハ乙藝ハ箱豆笥ハ藏めさせて堅ハ鎖ハ鍵ハ乙藝ハ預け留
守の間の用心ハ教諭ハ其の詰朝幾十名の講頼計ハ共侶ハ海船ハ乗ハ安藝ハ
投ハ走ハ其ハ是ハの後九四郎ハ我弟乾児の後生們ハ日毎ハ立寄ハ代詰来ハ留守の
安ハ諂ハ或ハ東西ハ贈ハ朱之介ハ親ハ
胸ハ酔ハ有一日酒ハ活ハ魚肉ハ徴ハ件の後生們ハ膝ハ圓坐ハ七四表面ハ

うち相譚せて。さきに笑ひ樂む程に後生仏ぐの者。客人は這頭に名高る乳守の里之紀典
まぢ。江口神崎に衰へて。京師の外に乳守に優る。柳巷に又あべくに誘ひ俺仏案内と
仕ん。家裏に入まぢと言語齋一そのまぐ色好き朱之介然こでも酔を癖るれ客連に
雀躍して。行ぎ〻に感共侶に身を起に乙艶云ハ屋林に朱之介の姿態を跋
躓ぎ〻立ぎ〻の中に二三名て藝を叱られ呼林られ。遂に六市四揔と喚敬
る。此彼両個の後生に尽く朱之介に従ひて乳守の里に赴く。柳巷内と那這と且く浮れ
あ程に朱之介今宵初て路柳墻花の美麗に。鄭声艶曲の狡猾に目撃を驚る
き魂に身を附ぎ誘青楼に登らんと。獨こ進む六市四揔ハ酒に酔と共る凶さ稍
醒て天明て俱まぢ。牽牛と織に科に。嫉れの腹を立て哥に遠ぎ必生に紛て戻に
優とぢ。と思も然に難て浮世低屋と喚敬る乳守第一番に名樓安内と。
件の二人に外に逃て宿所遠に朱之介六市四揔に迎る。知ぬ

ぬ出でせんとぎに。妓有に引れて樓に登る目擇て本樓第一と定る。今様に自殺の趣
央に。歌酬の王觴初會の式礼事訖れば客遊君に数名に取表示歌
艶曲の技を畫。或ハ馬潑六と奥を催す快樂の歓會の席上の光景に洞
房の趣に毎輯楷數に際限れば具に述に追ぎ
て。朱之介了髪に倡道れて臥房に入の。紋羅錦綉の重衾衣沈麝射鶏舌香の薫
亦人間の東西とも。ものの。身に遊仙の嵐に神女と睡る狭と疑る。俟て稍久くして那
今様に臥房に来ぎ。然ども疲の發りしそうち。解もぎ〻に枕に花せられ朱
之介に靴とその。礼を。名やめども。然も甲斐なぎ〻に。六市四揔に。
ねば熟睡を。その間に今様に朱之介に脇指の刀を竊に引抜て。吭を。俯る隨に
死に。その故に朱之介に濡衣を被せ。領主の聽に奉れ。堅く獄舎に繋ぎ。その詳の
趣に詳に知く欲せ。を編に継ぎ巻に易て第四輯の開場に解分を聽ん。

今様に自殺の趣第四輯の首巻に返と見るべし

近世說美少年錄第三輯卷之五終

美少年録 三

○著作堂年集近世説美少年録第三輯画工筆畊刷人目次

出像一十七頁　葵岡北溪

全弓淨書　公谷　金川

繍像刊字　朝倉　伊八

原　吉　知

○曲亭翁編述國字小説新舊畧目　書肆文溪堂藏梓

開巻驚奇侠客傳　第壹集五巻　當卯冬美少年録三輯と同時に賣出す

○この書は南北朝の和ぶくのうち新田楠のなかなかを載せ

人ぶりよき侠客の列伝を開巻驚奇の筆景にあらはすべき珍説

たゞぐく第二集　五巻續出　第一集の後引つゞき出板遅滞なし

○この編は館の小六敵討の復讐言の事起りて楠姑耶姫の列

伝とまじるこの回神出鬼没の異聞まことに毎集出像溪斎英泉画

里見八犬傳第八輯　故あり刊行遅延せしが今又刊行ふたゝび稿本出来則書

画彫刻を急ぎ来辰の春侠客傳初集美少年録

美少年録第四輯　三輯ゆゑ遅滞なきの卯の○本輯八巻嗣刻出来

そもそもこの書は容貌の美のみにて真の美少年なら

ざるの輯よりして漸々に容忠孝両全の真の美少年を指出

ぬ二熏一猶の勸戒ひとく分明なるべし○毎輯五巻三度の冬嗣出